

玉手箱

梅田 純子

「ねえ、聞いてよ」

姉の興奮した声が受話器からあふれ出る。

「お母さんたら、自分用のお茶碗とお箸を洋服筆筒の中に隠していたのよ。先週あなたが持ってきてくれたバウムクーヘンなんて、布団の中に隠してあったんだから」

「どうしてそんな事をしたのかなあ？」

曖昧な返事しかできない私。

「それにね、ズボンが小さくなつて入らないってお母さんが寝室から呼ぶもんだから見に行ったら、紙パンツを五枚もはいて、その上から布のパンツを三枚もはいていたのよ」

私は丸々と着ぶくれた母の様子を想像し、おかしさの中に悲しさを感じ、黙り込んでしまふ。姉は話を続ける。

「そうそう、探し物を手伝って欲しいんだけど。今からすぐに来てくれない？」

「何を探すの？」

「入・れ・歯。お母さんの入れ歯が昨日から無いのよ。今しがたデイサービスに出かけたから、留守のうちに家宅搜索をしたいの」

「ちよつと、入れ歯が無かつたら何も食べられないんじゃないの。入れ歯をしないままデイサービスに送り出したの？」と、言いかけてやめた。母の痴呆が進み、誰よりも苦勞をしているのは他ならぬ姉なのだ……。

実家に着くと、すでに姉は搜索を開始していた。

「あなたは台所を探して。私はお母さんの寝室を探すから」

姉はシャツの袖をまくりながら、シャーロックホームズのように指示を出し、私はワトソン君のようにその指示に従い台所へ向かう。

ガス台には、赤いマジックペンで「使うな！」と書いた紙が貼られていた。火事を心配する配慮だろうが、血のように真っ赤な文字の色と、文末の「！」が執拗に見えて、私の心をざらつかせる。

「このまま見つからなかったら、どうしよう」焦燥感に嫌悪感、複雑に入り混じった感情で、心が爆発しそうになったその時だ。

「あったよ！」

奥の部屋から姉の声がして、しばらくすると大きな銀色の箱を持って現れた。その箱の上に、ちよこんと入れ歯が載っている。

「押し入れの中にあったのよ。全く人騒がせなんだから……」

入れ歯を引き出しの定位置にしまうと、姉は目を輝かせながら、私の方に向き直り、抱えていた箱を食卓の上に置いて、言った。

「それより、これを見て。押し入れの奥から出てきたんだけどね」

ミカン箱ほどの大きさのその箱は、白地に小ささまざまな銀色のダイヤモンド型模様が箔押しされていて、蓋の中央には毛筆で『玉手箱』と書かれた桜色の和紙が丁寧貼り付けた。優しい筆跡は紛れもなく母のものだ。

「中身は何だろうね？」

姉の瞳はますます輝きを帯びた。

「預金通帳？ それとも宝石だったりして」

私も思わず身を乗り出した。

母は几帳面な性格で、若い頃から大切なものはきちんと保管する人だった。こんなふうにしてしまい込んで、忘れられた財産があるとしても、今の母の様子からすれば不思議ではない。

「もしかしたら、『浦島太郎』の玉手箱みたいに、白い煙がモクモク出てきて、美人姉妹が二人揃っておばあさんになるとか？」

「まさかぁー」と、言う姉はバツと蓋を開けた。中にぎっしりと詰め込まれていたのは、大量の古びた紙切れだった。

それが何なのか私にはすぐにわかった。姉もわかったのだろう。目が潤んでいる。

それは、五十年以上も前に私達が作った『お手伝い券』と『肩たたき券』だ。

『お手伝い券』は、姉が小学一年生の時に、買ってもらったばかりの二十四色の色鉛筆を使って母のために手作りしたのもので、『肩たたき券』は、姉に先を越されたと焦った私が、対抗して作ったものだ。

それから二人は、毎日競い合って何枚も何枚も『券』を作った。あの頃の私たちは、ただ純粹に、大好きな母の役に立ちたいと願っていた。母は嬉しそうに一枚だけ使って、「残りはいつか大切なことを頼む時のために大事にしまっておくね」と言っていたのだ。

「まだ、ランチには間に合うね」姉が壁掛け時計を見ながらポツンと言った。その手には入れ歯ケースが握られている。

『『お手伝い券』を一枚使いまーす』子どもの頃のような口調でそう言うと、姉はすつくと立ちあがり玄関に向かった。

「お姉ちゃんずるい！ 私だって、お母さんが戻ってきたら『肩たたき券』をつかってもらうからね」姉を見送りながら呟いた。

〈高校生の部 最優秀賞〉

二本のうまい棒

福井県立藤島高等学校 中根 詩彩

六月なのにカラッと晴れた昼時、私は駅のホームで一人のおばあさんと出会った。電車が来るまでの、三十分にも満たない時間ではあったが、私にとって忘れられない、忘れたくない時間となった。

隣に座った、ただのおばあさんが、心に残るおばあさんへとグレードアップしたきっかけは、おばあさんの「今日は暑いね。」という、いかにもそれらしい言葉だった。私は駅で声をかけられたのが初めてだったので、ひどく驚いた。私は人見知りなので、それが夜だったり、その人が知らない男性だったりしたら、目も合わせず逃げていただろう。しかし、実際は凜とした声だけど優しいような華奢なおばあさんだったので、福井の田舎だし大丈夫だろうと思いい、「そうですね。」と私は返事をした。

「あなたは学生さんかな。何年生だろう。」と問われ、私の心が騒いだ。私は高校一年生なのに、身長が一・五メートルほどで、よく初対面の人に中学生と間違われるのだ。私は背筋をこれでもかと伸ばし、「何年生に見えますか？」と聞く。すると、おばあさんは悩む。私は背伸びまではしたくなくて、それでもできるだけ大人に見えるように顔をキリリとさせる。おばあさんは口を開き、「中学、三年生かな。」と言う。脱力。私は情けない声で高校生であることを伝えた。おばあさんは笑い、つられて私も笑ってしまった。

このとき私はひそかに驚いていた。人見知りの私が初対面の、年が何倍も離れているであろう人と、友達のように話しているのだ。どうしてだろう。改めておばあさんを見てみた。聞き取り易い声、広がり易い話題選び、何より表情と身動きからつくられる雰囲気がかいのだと気付いた。これが本当のコミュ力。高校という新しい環境で、人見知りを克服しようと躍起になっていた私は、一瞬おばあさんが神様に見えた。

私のもっとおばあさんのことが知りたくなり、今度は自分からおばあさんのことを尋ねた。そして、おばあさんが九州から北陸三県に観光に来ていて、その帰りの電車を待っていたところであることを知った。私は自分の住んでいる福井県をおばあさんに好きになってもらいたくて、福井の豆知識を披露しようと思った。実をいうと、そうすることで中学生のイメージを挽回したかったからというのも大きな理由である。私はもう十六年も福井で生きてきた。さすがに何かあるだろうと思って頭の中を探す。何もなかった。思い返すと、友達と盛り上がったのは、福井が田舎であるという話だけで、福井のすごいところや、ために

なる豆知識について話し合ったことは、一度もない。愕然とした。そもそも、福井を好きになつてほしいと、真剣に考えたことさえ今回が初めてかもしれない。またも愕然とする。おばあさんから大事なことをひそかに教えてもらったお礼ができないからであり、自分は六年間、何をしていたのだと、後悔の念に駆られた。

おばあさんは少し様子の変わった私に気付いたのだろう、「電車の時間が近いのかい？ よし、いいものをあげよう。」と言つて、北陸限定の焼き蟹味のうまい棒を、五十本はありそうな袋から、二本を取り出して、私の手に乗せた。私は、またもらってしまったという気持ちと、電車の存在を忘れていたことへの焦りに襲われて、頭が真っ白になってしまった。もうお礼を言ったかすらも覚えていない。しかし、別れの言葉もそこに改札へ向かう私に向けておばあさんが、

「今日はありがとう！ 本当に楽しかった！」

と言つてくれたので、その言葉には、

「私です！」

と人目を憚らず返すことができた。負の感情で一杯になっていた私が、いい思い出としてこの日を書けるのは、おばあさんの最後の言葉のおかげだ。最後に私は、おばあさんにとつて私も心に残る人になれたと気付くことができた。

電車に乗ったとき、写真も撮らず、おばあさんの名前さえ知らないことに気付いた。そして唯一形として残つたうまい棒を見ながら、色々なことを考えた。純粹に楽しかったということ。うまい棒以外に残っているものがないことへの後悔。自分の周りのことについてもつと知らなくてはいけないという反省。しかし、最終的にはやっぱり楽しかったと思うのだから、やはりあのおばあさんはすごい人だ。

今、私はその反省を生かし、身近なことをよく調べるようにしている。例えば、福井市は空襲と地震を乗り越え、復興されたため、フェニックス由来の名前やものが多いと知った。

もう、あのおばあさんには会えないと思う。しかし、おばあさんに気付かされたことを忘れないことが、おばあさんへの恩返しになるはずだ。私は、この日のことを忘れないと決意し、うまい棒をかじった。